

●多くの著名人が足跡

高千穂は、九州山地の真ん中に位置し、中部九州の交通の十字路である。本県から熊本市に至る最短道路は、ここを通り、また五ヶ所高原を経て大野川沿いに竹田市、大分市へと道が通じている。このため、昔から多くの著名人が足跡を残した。

江戸前期の水戸藩主・徳川光圀は、明暦三(二六五七)年、「大日本史」の編集に着手した。同編集は一九〇六(明治三十九)年に完成する大事業であった。光圀は入念な史料の調査と史実の考証を行うため、家臣を各地に派遣した、その一人・佐々介三郎宗淳(むねきよ)が貞享二(二六八五)年、同僚の丸山雲平可澄(よしずみ)と七人の供を連れて、高千穂を通過して肥後(熊本県)に向かったことが知られている。

介三郎は延岡から高千穂を目指す途中で、「西州一の險難」と述べ、随行する丸山は「九州第

一の難所」と記録に留めている。

延宝三(一六七五)年に諸国の神社を巡り、「一宮巡詣記」を表した橘三喜も、同年九月初めに肥後高森から高千穂に入っている。三喜は肥前国(長崎県)平戸生まれの神道家で、このとき日向国内の神話伝承の地を訪ねた。

その後、弘化二(一八四五)年、豊後(大分県)の本草学者・賀来飛霞(かくひか)は、延岡藩の委嘱を受けて高千穂に入り、薬草の調査をした。「高千穂採葉記」としてその成果は今日まで残っている。飛霞は途中、高千穂郷河内村で出会った三人の村人について、着物は麻で、あい染めではなく、「白色の衣を服す。以(もつ)て神代の遺風とす」と記している。

高千穂に住む友人・小串大安に高千穂峽に案内された飛霞はその景観に感動、「ここは天下の景勝・耶馬溪をはるかに凌ぐ」とたたえた。ま



「神都高千穂大橋」(一番上)。高千穂の未来を切り開く

た、「日向池(真名井の滝)は、遠人の来たり見るもの多く」と、高千穂峽のにぎわいを表している。

このように高千穂を舞台に多くの物語が繰り広げられた。そこには内陸の十字路にふさわしい人間模様が染み込んでいる。

そして今、名うての難所も国道218号と325号の整備で大きく開けた。三月末には218号高千穂バイパスの「神都高千穂大橋」が完成。高千穂峽をまたぎ、高さ百十五メートル、長さ三百メートル。高千穂峽から見上げる、その威容が「内陸の十字路」としての高千穂の豊かな未来を映し出している。

確井哲也